

# ヤマトタケル と オトタチバナヒメ

第 7 回 松岡徳郎 フルート & オカリナ コンサート に よ せ て



表 紙 絵 は 5 月 出 版 ・ 小 学 校 用 「 歴 史 」  
明 治 20 年 日 本 武 尊 賊 首 を 誅 す

文 川 村 優 理

平 成 29 年 7 月 1 日

「ヤマトタケルの尊（みこと）は、景行天皇の第二子なり。容貌魁偉（体格が人並みはずれて立派で優れていること）。身長一丈（およそ3メートル）。力能く鼎（かなえ）をかつぐ。東西の賊を征して、大いに功あり。薨ずるに及び、帝（みかど）悼惜し、陵を能褒野（のぼの）に造り、白鳥陵と稱す。又東方を巡狩して、其の績を觀る」

（小学校用歴史・明治二十年）より。

ヤマトタケルが伊勢国能褒野で薨じ、同地に「陵」を造って葬ったことは、『古事記』『日本書紀』ともに同じですが、ヤマトタケルが、さらに白鳥になって西の方に飛び、降り留まった地にあらたに「陵」を起こしたという記事は、「古事記」と「日本書紀」で違っています。『古事記』では、能褒野から白鳥となって飛び、河内国志幾に留まり、そこに「陵」を起こし、これを「白鳥陵」と呼びますが、のちここからまたも白鳥となつて飛んで天に登つたと言われています。

『日本書紀』巻第七では、白鳥となって能褒野  
陵から出て、まず大和国琴弾原（奈良県御所市  
富田）にとどまり、そこに「陵」を造ったとこ  
ろ、さらに白鳥となって河内国にいきとどまっ  
たので、そこにも「陵」を造ったが、また白鳥  
となって天に上ったとあります。『日本書  
紀』では最初の能褒野陵、大和琴弾原の「陵」、  
河内国旧市邑の「陵」と三陵を「白鳥陵」とよ  
んだとあります。



オウスのミコトは、景行天皇の2番目の皇子  
です。

景行天皇には80人の皇子がいましたが、そ  
の中で、オウスノミコトが、もつとも強く、勇  
敢で、もつとも美しい若者でした。

オウスノミコトが16歳になると、天皇は、  
こんなことを命じました。

「遠く西の国、九州には、クマソタケルという  
荒くれ者の二人の兄弟がいる。わしの命令にも  
従おうとしないので、お前が行って、やつらを  
やっつけてこい。」

クマソタケルたちと戦うのはたいへん危険なことです。

オウスノミコトは九州に出発する前に、伊勢に立寄っておばのヤマトヒメに相談しました。

ヤマト姫は、自分の美しい衣を取り出し、

「これを持っていきなさい。困ったときにはきつと役に立つでしょう」

と、オウスノミコトにあげました。

オウスノミコトが、クマソタケルの家に行ってみると、家の周りを、何重にも、兵士たちがとり囲んでいます。

家の中には、おおぜいの人々が集まり、にぎやかに、宴（うたげ）が開かれています。

「このままでは、とても近づけない」

オウスノミコトは、ヤマトヒメにもらった衣をはおり、女の人のように髪をほどき、クマソタケルの家で働く女の人たちの中に混じって家に入ると、クマソタケルたちがよっぱらって眠りこけてしまふまで待ち、すきを狙って、ふところに隠していた劔（つるぎ）で二人を倒しました。

クマソタケルは、「私たちに勝つとは、たいしたものだ。これよりは、私のタケルという名前を使ってください」

と、言い残して亡くなりました。

それ以来、オウスノミコトは、ヤマトタケルと、名乗ることになりました。

九州を平定した帰り道、出雲の国のイズモタケルも倒し、ヤマトタケルは、いきようようと、天皇の元へ帰りました。

「お父様、ご命令どおり、クマソタケル兄弟、イズモタケルを倒して、九州と出雲を平定してきました！」

すると、天皇は、次の命令を下しました。

「東には、12の国がある。ヤマトタケルよ。次は、東国の神や人々がわしに従うように戦ってこい」

天皇は、天皇の使者であるという印として、ヤマトタケルにヒイラギの木で作った長いほこを授けました。

ヤマトタケルは、東国へ行く途中、また伊勢に  
いる、おばのヤマトヒメのところに行きました。  
「西の国の敵たちを倒して、やっと帰ってきたと思  
ったら、こんどは、東の国々へ行けと言われまし  
た。帝は私に死ねと言っておられるのでしょいか。」  
それを聞いてヤマトヒメは、クサナギの剣と、袋  
をくれました。  
「もし危険なことがあったら、この袋の口を開けな  
るのですよ。」

ヤマトタケルは、ヤマトヒメのいる伊勢から、尾  
張の国、相模の国と進んで行きました。

相模の国では、国のみやつこが、ヤマトタケルに  
嘘の話をしました。

「あなたさまの目の前に広がっているこの野原の中  
に、大きい沼がありました、沼には恐ろしい神が住  
んでおります。ぜひ、退治してもください。」

勇敢なヤマトタケルは、それを聞いて、野原の中  
に入って行きました。ヤマトタケルが野原の真ん  
中まで行ったところを見はからい、国のみやつこ  
は、野原に火を放ちました。

火は、ヤマトタケルのところに、どんどん迫ってきます。

ヤマトタケルは、草薙の剣（つるぎ）で、草をなぎ払い、その場所で、ヤマトヒメからもらった袋を開けてました。

すると、そこには、火打ち石が入っていました。

ヤマトタケルは、火打ち石で火をおこし、向い火を付けて燃え来る火をしりぞけ、野原から脱出すると、国のみやつことその手下を切り倒して、その場に火を付けて焼いてしまいました。

そこが、現在の「焼津（やいづ）」といえます。

ヤマトタケルは、さらに東に進みました。

走水（はしりみず）の海を渡ろうとすると、海峡の神が、波を立ててじやまをし、船を前に進ませようとしません。こいでも、こいでも、船はぐるぐる同じところを回るばかりです。

困りはてていると、ヤマトタケルの妻のオトタチバナヒメが言いました。

「私が海の中に入りましょう。そうすると、海はし  
ずまります。あなたさまは東の国を平定し、天皇の  
ご命令を成し遂げて下さい。」

オトタチバナヒメは、菅（すげ）の畳を八枚波の  
上に置き、その上に絹の畳を八枚重ねて、船から海  
に降り立ちました。  
すると、みるみる波は静まり、ヤマトタケルの船  
は、前に進むことができず止まりました。

沈んで行く畳の上で、オトタチバナヒメは、こん  
な歌を歌いました。さねさし 相模の小野（お  
の）に

燃え迫る火の

火の中に立ち

私の名を呼んでくださったあなた

それから七日が過ぎ、オトタチバナヒメの髪にさ  
していたくしが、海辺に流れつきました。

ヤマトタケルは、クシを拾い上げ、オトタチバナ  
ヒメのお墓を作りました。

そこから、さらに東に進み、荒々しい敵たちに勝  
つて、都に戻って来るその途中、足柄山の坂本とい  
うところで食事をしていると、坂の神が、白い鹿に  
姿を変えて現れました。



そこから、さらに東に進み、荒々しい敵たちに勝って、都に戻って来るその途中、足柄山の坂本というところで食事をしていると、坂の神が、白い鹿に姿を変えて現れました。

ヤマトタケルが食べていたノビルの草を投げつけますと、それは鹿の目に命中し、鹿は死んでしまいました。

ヤマトタケルは、坂の上に立ち、三度ため息をついて言いました。

「我（あ）が妻よ」

それ以来、その国のことを「あづま」と呼ぶことになりました。